

KASUGAI
CITY
PHILHARMONIC
ORCHESTRA

THE THIRD REGULAR CONCERT 17 JULY 1994

春日井市交響楽団

第3回 定期演奏会

1994年7月17日(日) 15:00開演 春日井市民会館

主催：春日井市交響楽団

共催：春日井市

後援：愛知県教育委員会

春日井市教育委員会

中日新聞本社



第2回定期演奏会（1993. 1. 10 春日井市民会館）

ごあいさつ

春日井市交響楽団会長
中部大学長 山田 和夫



本日は、春日井市交響楽団第3回定期演奏会によるこそおいで下さいました。
アマチュア・オーケストラのカポも、これまでの2回の定期演奏会や昨年の
《第九》演奏会を経て、順調に発展をつづけて参りました。

これも、カポの演奏会にいつもおいで下さる多くのファンのみなさまのご支援のおかげと感謝いたしてお
ります。今回の定期演奏会は、その順調な発展を物語るものとして、チャイコフスキーの「交響曲第5番」
を中心にした本格的なプログラムとなりました。これも、団員の努力もさることながら、客演指揮をお引き
受け下さった竹本泰蔵氏のご熱心なご指導のおかげと、ここからお礼申し上げます。

カポも、みなさまのご期待に応えることができますよう、今後さらに市民のオーケストラとしての自覚を
深めて参りたいと存じます。

なお一層のご支援とご協力をお願いいたします。

では、ごゆっくりお楽しみ下さい。

お祝いのことば

春日井市長
春日井市交響楽団名誉会長 鶴飼 一郎



春日井市交響楽団第3回定期演奏会を鑑賞できますことを、市民の皆さまと
もに心から喜びたいと思います。

昨年は、市制施行50周年記念「第九演奏会」に市民参加のオーケストラとして
出演され、石丸寛さんの指揮により感動的な演奏を披露されたことは、未だ記憶に新しいところであります。

春日井市交響楽団の定期演奏会も本年度で3回を数え、本市の「文化の顔」として市民の皆さまの中にすっ
かり定着した感があります。

このたびの演奏会の開催にあたり、交響楽団を支える関係者の方々の日頃のご尽力にあらためて敬意を表
する次第です。

音楽は、人の心に潤いと安らぎを、そして感動と明日への活力を生み出すものであります。繊細にして華
麗なる演奏を通じ、より一層音楽愛好家の輪が広がり、さらに大きな音楽文化の花が開くことを期待して、
お祝いのことばといたします。

PROGRAM

「ロザムンデ」序曲

(「魔法のたてごと」序曲)

“Rosamunden-Ouverture” [1854] D. 644

(“Ouverture zum Zauberspiel Die Zauberharfe” [1819])

シューベルト作曲

(Franz Schubert 1797-1828)

+

フルートとハープのための協奏曲 ハ長調

Konzert in C für Flöte, Harfe und Orchester KV. 299 [1778]

モーツァルト作曲

(Wolfgang Amadeus Mozart 1756-1791)

+ 休 憩 +

交響曲 第5番 木短調

Symphonie Nr. 5 e-moll op. 64 [1888]

チャイコフスキー作曲

(Peter Iljitsch Tschaikowsky 1840-1893)

客演指揮 竹本 泰蔵

フルート 五島 憲一

ハープ 木村 衣里

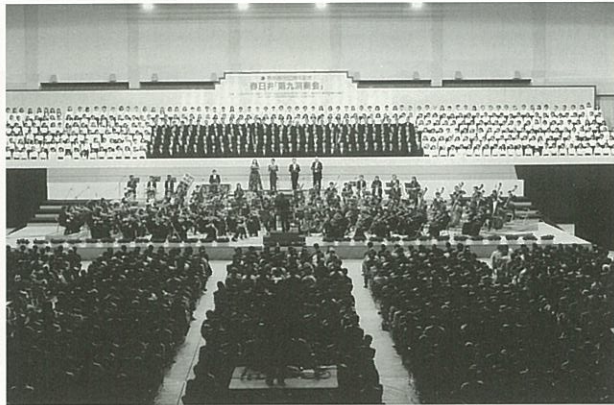
*本日演奏される「ロムザムンデ序曲」の楽譜はトヨタミュージックライブラリーから貸与を受けました。

プロフィール

春日井市交響楽団

Kasugai City Philharmonic Orchestra

平成2年11月、春日井市の市民アマチュアオーケストラとして設立。以来、創立記念演奏会（平成3年1月）・第1回定期演奏会（平成4年1月）・第2回定期演奏会（平成5年1月）など毎年自主演奏会を開催している。平成5年12月、春日井市制50周年記念行事の「第九演奏会」（指揮：石丸寛）には地域の合唱団とともに128名の特別編成の大オーケストラで参加した。定期演奏会の他、市役所でのコンサート・演奏旅行・小学校の音楽教室・レコーディング・ハイビジョン映



昨年12月の第九演奏会

像出演など活発に演奏活動を行っている。楽団員資格は、年齢を問わず、広くアマチュア演奏者に門戸を開いている。常に最高をめざして、芸術性の高い名曲の名演奏を提供することをモットーに活動を展開している。

なお、愛称『カポ』は英字名称（Kasugai City Philharmonic Orchestra）の頭文字をとった。



演奏旅行(岐阜県武儀町)



レコーディング風景(愛知芸術文化センター)

医療法人 三仁会

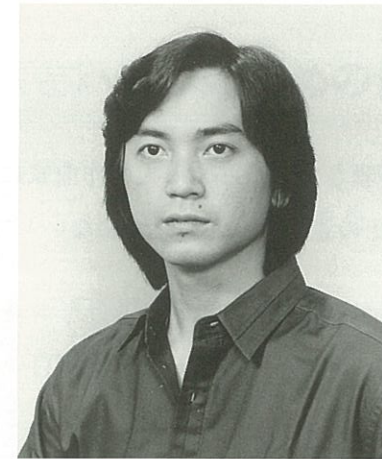
春日井整形外科病院

院長 花村 浩 克 (春日井市交響楽団々長)

春日井市東野町3丁目15-1 電話 <0568> 51-8987

※看護学生になりたい方、ご連絡下さい。

客演指揮



竹本 泰蔵 (たけもとたいぞう)

1956年神戸生まれ。

1974年、京都市立芸術大学音楽学部作曲科に入学し、翌年指揮科に転科。その間、広瀬量平、阿部幸明、保科洋、及び山田一雄の諸師に師事。

1976年、名古屋フィルにヴィオラ奏者として入団。

1977年、カラヤン・コンクール・イン・ジャパンでベルリンフィルを指揮、第2位に入賞。

1978年、日本ユースシンフォニーの指揮者としてロンドンでデビュー。

同年、カラヤンの招きによりベルリンフィルで2年間研修を行い、親しい指導をうける。

1981年の名古屋フィルアシスタントコンダクター就任を経て、現在コンサート、オペラ、バレエ、ミュージカルの公演指揮の他、編曲、ラジオ番組でパーソナリティーを務める等多方面に活躍中。

ソリスト

フルート 五島 憲一 (ごしまけんいち)

1954年名古屋生まれ。

中学生よりフルートをはじめる。名古屋工業大学管弦楽団、同OBオケを経て、現在春日井市交響楽団で、フルート奏者の傍ら、運営委員及び管トレーナーを務める。

ハープ 木村 衣里 (きむらえり)

金城学院中学の2年生からハープを岡島多恵子氏に師事。これまでに、金城学院大学管弦楽団定期演奏会を始め、春日井市交響楽団の創立記念演奏会や定演などでハープを担当。日本ハープ協会会員・名古屋ハープ合奏団団員。乗馬やテニスなど趣味も広い。名古屋の栄生駅近くの花屋の三人娘の次女。



トレーナー

西野 淳 (にしのだいじゅん)

1965年生まれ。

愛知県立芸術大学音楽学部作曲科卒業。作曲を寺井尚行、松井昭彦、兼田敏、岡坂慶紀の各氏に、指揮を秋山和慶、増井信貴、川本統修、河地良智の各氏に師事。主に吹奏楽の作・編曲者として活躍、最近では「'94わかしゃち国体」公式行進曲を作曲した。名古屋二期会オペラ公演・名古屋市民芸術祭オペラ公演に於いて竹本泰蔵氏の副指揮を務める。又アマチュアのオーケストラ、ブラスバンドのトレーナー、指揮者としても活躍中。

曲目解説

シューベルトとモーツァルトとチャイコフスキー——優雅さでは、この三人の作曲家にまさるものはありません。本日の春日井市交響楽団第3回定期演奏会は、その意味で、これまでにないとても高趣味なものになりました。(都築正道)



《ロザムンデ》序曲

—《魔法の竖琴》序曲—

フランツ・シューベルト(1797-1828) 作曲

《ロザムンデ》序曲は、シューベルトの美しいメロディとあふれるほど豊かな楽想がいっばいつまった宝石箱のような珠玉の名品です。ゆっくりした序奏と速い主部の2部構成で、シュー

ベルトらしい自然で素朴な「牧歌的な舞曲」(パストラレ)です。

《ロザムンデ》全11曲は、劇の「付随音楽」として作曲されたものです。当時、お芝居が上演されるときは、劇中で色々な音楽が用いられました。オペラと違って、全体は普通のお芝居のように台詞ばかりで演じられるのですが、ときには主人公がアリアを歌ったり、合唱曲が歌われたり、バレエが踊られたり、場面転換のための間奏曲が演奏されたりと、たくさんの音楽が必要でした。1823年、シューベルトが、詩人ヘルミーナ・フォン・シェジーが書いたロマン劇『キプロスの女王ロザムンデ』のために作曲したのがこの付随音楽《ロザムンデ》です。この序曲のほかにも、三つの間奏曲や合唱曲やロマンス(アリア)やバレエ音楽でできています。劇そのものは、シューベルトの音楽を付けて初演されましたが評判が悪く、結局、2度上演されただけで終わりました。台本はいまだに失われたままなので、再演されることはありません。しかし、シューベルトの音楽は健在で、「ロマンツェ」は独立した歌曲として有名であり、「羊飼いの合唱」や「狩人の合唱」はいまでもよく歌われます。とくに第3番の間奏曲のメロディは、《弦楽四重奏曲第13番》(1824)とピアノのための《即興曲》(1827)でおなじみのものです。

この劇音楽にはもともと序曲は作曲されなかったもので、初演のときに、シューベルトは、前の年に書いたままになっていた歌劇《アルフォンソとエストレッラ》の序曲(1822年)をそれに当てました。また、出版のとき(1827年)には、ゲオルク・フォン・ホフマンのメロドラマ《魔法の竖琴》(1820年)のために書いた付随音楽の序曲をそのまま流用しました。それで、《ロザムンデ》序曲は二つあることになり、この曲には名前が二つあることになりましたが、いまでは、《ロザムンデ》序曲といえば、この《魔法の竖琴》序曲ということになっています。

序奏：ゆっくりと・ハ短調・3/4拍子

主部：快速に生き生きと・ハ長調・2/2拍子

《フルートとハープのための協奏曲ハ長調》

—KV.229—

W.A.モーツァルト(1756-1791) 作曲



「友よ、私と一緒に悲しんで下さい！ 今日私の生涯でいちばん悲しい日でした」——1778年7月3日、パリのモーツァルトは、故郷のザルツブルクにいるヨーゼフ・ブリンガー神父に一通の手紙を書きました。ただでさえ無責任で親不孝だと思われつづけてきたモーツァルトです。二人の帰りを待ちわびている父や姉に、どうして、「異郷の地で母を亡くした」などといえましようか。「神父から父親や姉に伝えてもらいたい」——思いあまった末のモーツァルトの判断でした。22才のモーツァルトは、彼の才能が発揮できる恵まれた職場を求めて、母親と二人で旅に出ました。だか、彼を雇ってくれるような理解ある王侯貴族はどこにもいません。結局、昔の夢を追いながら、遥か遠くのパリにまで足を延ばさざるをえなかったのです。そのパリで、彼はこれまで以上に人生の無情をさんざんに味わされることになりました。特に、彼をがっかりさせたのは、パリの貴族たちの新しい音楽に対する無関心さです。彼らはモーツァルトのことを、今になっても、最初にみた時とおなじような7歳の子供だと思っているのでした。

でも、そんな貴族の中であって、ド・ギーヌ公爵だけは違いました。彼はモーツァルトの音楽の素晴らしさを良く理解していて、モーツァルトに娘の結婚式のための祝典曲を依頼してきました。公爵がフルートの名手であり、その娘もハープを巧みに奏いたので、ここにフルートとハープを独奏楽器とする珍しい形式の協奏曲が生まれました。それはモーツァルトの母親が亡くなる3ヶ月ほど前のことです。これまでの「旋律楽器のフルートと伴奏楽器のハープ」といった常識的な組み合わせを越えて、二つの楽器がお互いに相手を讃え合い、励まし合い、尊敬し合うさまは、まさに父と娘の信頼と愛情を語ってあまりありません。ド・ギーヌ公爵父娘(おやこ)二人の幸せに満ちた合奏は、どんなにか婚礼の宴を盛りたてたことでしょう。

それに、さすがモーツァルトです。音楽はすこしも休むことをせず、まるでカレード・スコープを見るように、絶えずその美しい姿をより美しいものへと変貌させていきます。彼にとっては、悲しみと苦しみのパリも、万華鏡に写った幻のひとつに過ぎなかったのかも知れません。楽器編成は、オーボエ2本とホルン2本と弦楽器5部に、フルートとハープのソロが加わった小さなものです。モーツァルトは、この二人の家庭音楽家のために、各楽章ごとに完全な型のカデンツを書いたといわれていますが、残念ながら現存していません。本日のソリスト二人は、後生の演奏家たちによる数あるカデンツのなかでも、もっとも華やかで格調高いカール・ライネッケのものを 사용합니다。

第1楽章：アレグロ(快速に)ハ長調・4/4拍子・協奏風ソナタ形式

とても明るいハ長調の分散和音(ドーソミドミソ・ドー)のユニゾンで始まります。これが第1主題です。バロックの「合奏協奏曲」のように、最初から二つのソロ楽器が全合奏に加わります。二人のソリストにとっては、指ならしの「トッカータ」と言ったところでしょうが、音楽全体が素晴らしく輝いて聴こえるのは、

豊かな倍音をもつハープが妖精となって、すべての音符にきらびやかな魔法の粉をふりまいていくからです。そして、オーボエの上昇旋律を受けてすかさず弦楽器が下降してきたり、フランス音楽に多い過度な装飾音がなんども現れるのも、祝典には不向きな「空間恐怖」を克服して、楽曲すべてを美しい音で埋め尽くそうとするからです。第2主題は、ホルンに、オーボエ・ヴィオラ、それにヴァイオリンの3群が立体的に組み合わせられて、見事に遠近法を形作っています。そのほかにも、フルートによる副次主題や展開部での独奏旋律も登場してきますので、この第1楽章は、たくさんの人物による「ご祝辞合戦」といった華やかさです。

第2楽章：アンダンティーノ（ややゆっくりと） ハ長調・3/4拍子・ソナタ形式

モーツァルトの良きロココ趣味が、ゆったりとのびやかに展開されていきます。ソナタ形式ですが、モーツァルトは、ここではわざと展開部をなくして、その日の花嫁のように、可憐で、愛らしく、甘美で、官能的で、優雅で、華やかな中間楽章にしています。それに、ハープのアルペッジョが単なる伴奏和音に終わらず、籠の目を編むように小さなモチーフを歌いつぎながら、フルートの単旋律を色鮮やかに飾っていきます。親子水入らずの会話を楽しむ二人のために、管楽器のオーボエとホルンは一時お休みです。

第3楽章：ロンド・アレグロ（快速に）ハ長調・2/2拍子・ロンド形式

華やかなロンド主題がなんども繰返し登場して、幸せな宴は終わることなくいつまでもつづきます。ロンド主題は二つあり、そのほかに魅力的な美しいエピソードも二つ加わって、多様な楽想と大胆な転調と自由自在な変奏がないまぜになりながら、「ロンド形式」が巧妙に展開されていきます。モーツァルトの独創性が顕著であればあるほど、それだけ技術的にきわめて高度なテクニックを必要とするので、聴く方にとって、奏く方にとっても、とてもスリリングなフィナーレです。それだけ、成功したときの喜びは大きなものがあります。それが、演奏会の最大の魅力だといっていいでしょう。

《交響曲第5番》

ピョートル・チャイコフスキー(1840-1893) 作曲



多くのファンに期待されながらも《交響曲第5番》が書かれたのは、《第4交響曲》から11年もたった1888年（48才）の夏のことでした。そういえば、11年前の1877年は、彼にとって「苛酷な運命の年」そのものでした。乗り気でなかった教え子のアントニーナとの結婚はまたたくうちに破局を迎え、「世間から同性愛者だと思われるに違いない」という恐れが彼を自殺未遂にかりたてました。そんなチャイコフスキーを救ったのが、鉄道経営者の未亡人フォン・メック夫人の励ましと経済的援助です。旅が大好きなチャイコフスキーは、元気を取り戻すと、1887年末から1888年3月にかけて、自作を指揮しながら精力的にヨーロッパ旅行をおこないました。たくさんの賛辞とたくさんのお金をえて結果は大成功でしたが、再び心身ともに疲れ果ててしまいました。

ロシアに帰った彼は、田舎に新しい家を構えて静養につとめましたが、ヨーロッパの最高のオーケストラを指揮した感激が忘れられず、その思いがいつの間にか新しい交響曲の作曲へと彼を誘っていきました。そして生まれたのが、この《第5交響曲》です。ロシア国民音楽家として名高いバラキレフの依頼で3年前の1885年に書かれた標題音楽《マンフレッド交響曲》（“Manfred”, 1886年初演）を加えれば、第6番目になります。交響曲に対してはそんなベテランのチャイコフスキーでしたが、最初、なかなか書き始めることができませんでした。これまで着ていたロシア音楽の野良着を脱ぎ捨てて、ヨーロッパ音楽のタキシードに着替える決意が中々つかなかったからです。作曲が少しづつ進むにつれて、天来の豊かな創作意欲が炎のように燃えてきました。それに、彼がこれまで抱いていた引っ込み思案や自信喪失症も次第に姿を消していきました。1888年の5月にはスケッチが出来上がり、8月14日にはもう総譜を書き終えていました——「ありがたいことに、前作に劣らぬものが出来たと思う。そう思えることがとても嬉しい」。総譜を見せた友人の音楽家たちからも絶賛を浴びて、彼はとても勇気づけられました。しかし、ペテルブルグでの初演は、一般の評判はよかったものの、専門家たちからは大変な酷評で迎えられ、今回も容赦なくたたかれました。初演運のなさは、いつもながら彼を苦しめます。しかし、幸いにもドイツ公演の評判はとても好意的でした。チャイコフスキーも数週間後には弟に宛てて、「この交響曲は私に悪をなすのを止めたようだ……私はまたこの曲と恋に落ちた」と書き送っています。また、チャイコフスキーの自伝的な性格が強いこの交響曲は、バルリオーズの「幻想交響曲」（1830）と色々な意味で多くの類似点を持っています。標題的にも、オーケストレーションにおいても、曲の構成においても、「幻想」の妹です。

第1楽章 序奏（ゆっくりと） ホ短調・4/4拍子

主部（動きを持って快速に） ホ短調・6/8拍子・ソナタ形式

序奏は、低音弦の伴奏に導かれたクラリネットの深いため息が始まります。まるで暗闇の中のなかで苦悩に耐えているようなこの主題は、チャイコフスキーの交響曲によく現れる「運命の動機」といわれるもので

楽器技術の [ピアノ調律技術 管楽器リペア技術] エキスパートを養成!!

コンサート 楽器技術者

喝采の陰に役者あり

◆音づくり10年の名門校/楽器技術のスペシャリスト養成◆ 〈愛知県専修学校認可〉

ピアノ調律技術コース

管楽器リペア技術コース




中部楽器技術専門学校
CHUBU TECHNICAL ACADEMY OF MUSICAL INSTRUMENTS

〒466 名古屋市昭和区阿由知通三丁目13-6 TEL.〈052〉741-6788代 FAX.〈052〉741-6789

す[譜例1]。この主題そのものはグリンカのオペラ《皇帝の生涯》からの借用だといわれていますが、当時のチャイコフスキーの出口のないペシミスティック（悲観的）な閉塞状況を反映してあまりありません。この曲は、「運命を完全に甘受したものだ」とチャイコフスキー本人はしていますが、全楽章を通して現れるこの「固定主題」の展開を順を追って聴いていくならば、甘受からほど遠い、激しく挑戦的なものを感じさせずにはおきません。そして、この交響曲誕生の経緯を知ったならば、彼の本来のモットーが苦悩の末の「運命からの勝利」であることに、だれもが気がつくことでしょう。

序奏でのクラリネットのメロディが、そのまま主部に進んで、スラヴ行進曲の第1主題へと発展していきます。そして、弦楽器が、二つの和音を交互に響かせながら新しいテンポでとても静かに動き始めます。クラリネットとファゴットがユニゾンで新しい主題を奏でます。これは、《第4交響曲》で私たちになじみの、どこかおどおどした感じの不安定なものです。第1主題に絡むエピソードは「にせの第2主題」といわれ、「恋人を抱きしめるためにウンと延ばした腕」（ホプキンス）のように魅力的です[譜例2]。活発になってくる管楽器に勇気づけられながら、主題は次第に自信を深めていきます。そして、フルオーケストラが、最初のクライマックスをつくります。このリズムは、上昇する音階をともなつてなんども繰り返されます。金管楽器も一斉に「狩の呼び声」を吹き鳴らし勝利のファンファーレを奏でますが、最後は最初よりも、より暗く、より憂鬱（ゆううつ）な気分のうちに終わります。

[譜例1] 「運命の動機」



[譜例2] 「にせの第2主題」



第2楽章（ゆっくりと・歌うように・やや自由を持って）

ニ長調・12/8拍子 三部形式

低音弦による厳かな開始は、後にラフマニノフが彼の《ピアノ協奏曲第2番》で用いたほど、とても印象的です。「幻想交響曲」の第3楽章「田園の風景」そのまま、ここではホルンとオーボエが恋人同志のように愛を語ります。ホルンがバス歌手のようにベルカントで朗々と歌い、オーボエはソプラノ歌手のようにコロラトゥーラでそれに応えます。弦楽器がコーラスとなって、まるでこの楽章はオペラです。カポの管楽器のソリストたちの名演をお聴き下さい。

第3楽章（きわめて快速に） イ長調・3/4拍子 ワルツ・三部形式

チャイコフスキーは、本来は滑稽なスケルツォ楽章であるべき3楽章にワルツを持ってきました。交響曲とワルツの組み合わせは、《幻想交響曲》が最初です。チャイコフスキーは、この時期にバレエ《眠りの森

の美女》の構想も練っていましたが、スケルツォをやめて、迷わず美しいワルツにしたのでしょうか。ただ美しいだけでなく、ファゴットがわざとワルツのステップを間違えて見せて、スケルツォの性格も忘れてはいません。《幻想交響曲》が「ドシラソ…」と下降する音階を隠し味として用いているのに対して、「ドレミファ・ミファソラ…」と複雑に上昇する音階を使っているのは面白いところです。因（ちなみ）に、彼の最後の交響曲《悲愴》の第2楽章では、「ドシラソ…」のベルリオーズ型に戻っています。

第4楽章 序奏（ゆっくりと・堂々として） ホ長調・4/4拍子

主部（快速に・いきいきと） ホ短調・2/2拍子 ロンド・ソナタ形式

ホ長調は弦楽器がもっともよく響く調性です。フル・オーケストラが大音声で雄叫びを上げながら、怒涛（どとう）のようにフィナーレへとなだれこみます。まさに、行進曲を得意とするチャイコフスキーならではの、興奮と感動を誘う終楽章です。第1楽章に現れたコザック・ダンスのリズムに乗って、「運命の動機」がロンドの主題のようになんども繰り返されます。そして、激しいティンパニの雷鳴の高まりとともに、全楽器が最大のクライマックスを築きます。すべての音楽が一瞬止まるゲネラル・パオゼ（大休止）のあと、オーケストラは再び隊列を整えて、堂々と勝利の行進を始めます。苦渋に満ちた「運命の主題」は、希望に燃えるホ長調へ転調して、そのペシミスティックな性格をかえます。この主題の短調から長調への転調は、いうまでもなく、ベートーヴェンの《第5交響曲》「運命」の「苦悩を通して歓喜へ」と同じモットーを現わしています。弦楽器群がわが身を燃焼させながら次第に上昇をつづけ、後に続く金管のために、「運命の主題」を勝利に変える道を整えていきます。すべての音楽が緊迫した音階に結集して、生命の旗を翻しながら勝利の階段を登るのです。《第4交響曲》の諦念（ていねん）から生まれた《第5交響曲》は、その「苛酷な運命」を克服して、生きることの喜びを歌う勝利の賛歌となって全曲を終えます。

平 田 眼 科

診療時間 午前8時45分～午前11時45分
午後3時30分～午後6時30分
休診日・日・祝日と土曜午後

春日井市瑞穂通6丁目22-3 ☎ <0568> 84-6638

傲慢ではなく謙虚に

春日井市交響楽団

音楽監督 都築正道

「カポの定期演奏会、おめでとうございます」——と、演奏する私たちが、ファンのみなさまにお祝いを述べるのはいささか傲慢（ごうまん）かも知れません。でも、私たちは、本日のこの演奏をお聴きになったみなさまが、とても感激して私たちを誉めて下さるに違いないと思うからです——

「竹本泰蔵さんを、よくカポの定演にお招きできましたね」

「協奏曲のソリストを団員がつとめるまでにカポも立派に成長したのですね」

「チャイコフスキーの後期の交響曲に見事に挑戦しましたね」

「演奏曲目すべてにとっても魅力を感じました」

——そして、そういった言葉を喜んで受けたいと思うからです。

私たちをこんな高ぶった気持ちにさせるほど、この1年でカポは大きく変わりました——まず、昨年暮れに行われた「春日井市制施行50周年記念ベートーヴェン《第九交響曲》演奏会」が、カポ成長の最大のインパクトでした。プロでも難しいこの大曲に挑むため、1年間にわたって、アントニーン・キューネル先生から厳しいトレーニングを受けました。それが技術的な基礎となり、今回の定演への大きな自信となりました。

さらに今年は、委嘱作品「春日井の四季」（菰田尚子さん作曲）の録音と録画もあり、また、岐阜県武儀町の記念演奏会にもご招待されました。いずれもカポにとって初めての経験であり、晴れがましい出来事でした。春日井市と春日井市民のみなさまが、このカポを「市民のオーケストラ」として誇りに思い、大切に下さっている——といった実感ほど、私たちを勇気づけ、励ましてくれるものはありません。そんなみなさまの熱意によって育てられたカポほど、幸せな市民オーケストラはありません。

いま、待望の竹本泰蔵先生のご指導を得るまでに、いささかなりとも成長した私たちの感謝の気持ちを込めながら、みなさまに、「カポの定期演奏会、おめでとうございます」と謙虚に申し上げたいのです。

演奏会のエチケット

Q: 交響曲や協奏曲の楽章の間で拍手をしてはいけませんか？

A: ええ、原則としてはいけません。いえ、どれが原則でどれが例外かは難しいところですから、そんな曖昧な言い方よりも「絶対にいけない」と思っていた方がいいでしょう。

Q: でも、感激して思わず拍手をしてしまうことがありますよ。

A: ええ、それは例外です。でも、本当に感激したら拍手などできないものです。時と所を得ない拍手は、みんな嘘の拍手だと思われても仕方ありません。

Q: 演奏会って、そんな堅苦しいものなのですか？

A: むろん、歴史的にみても、ベートーヴェンの時代からは、さまざまな意見をもった一般大衆が演奏会の中心に躍り出てきましたので、各楽章毎に拍手をしたり、野次をとばしたり、また気に入った楽章だけアンコールしたりで、彼らの好みに合わせて拍手も野次も勝手気ままでした。そんな彼らが、自分たちの音楽を新しく創っていったのです。それから二百年近く経ちましたから、音楽の楽しみ方も大いに変わりました。いまでは演奏会全体を一つの作品としてまるごと味わおうというぜいたくで欲張りな時代になりました。作曲家も演奏者も聴衆も、フルコースのフランス料理のように思っているのですから、お皿が出てくる毎にいちいち誉めないのです。

Q: どの曲が何楽章なのか良く分かりませんけど…？

A: 交響曲は「急—緩—急（舞曲）—急」の4楽章であり、協奏曲は「急—緩—急」の3楽章だということを知っておけばいいのです。曲の構成を知ってから音楽を聴くと、作曲家や演奏家の獨創性や主張やユーモアなんかも分かって、なおさら興味がわきますよ。でも、例外もありますから、少し早く会場にきて当日のプログラムで何楽章かを確かめておけば心配ありません。

Q: でも、そんな余裕がないときはどうしたらいいのでしょうか？

A: 決して最初に拍手しようなどと思わないことです。音楽を聴きにきたのであって、拍手をしにきたのではないのですから、最後の音の、そのまた余韻が消えていくまでたつぷりと演奏を楽しもうではありませんか。それに、演奏者も、最初はパラパラと始まり、次第に大きくなっていくクレッシェンド型の拍手の方が嬉しいのですから…。みんなのあとで遅れて拍手しても、あなたの感激と感謝を演奏者に伝えるのに決して遅くはありません。

Q: どこで終わったか分からない、いじわるな曲もあるでしょう？

A: 別にいじわるではないのですが、注意をしなければいけないのは、このチャイコフスキーの「交響曲第5番」の終楽章がそれです。終わり近くで、突然音楽が大きくなって、一瞬ピタリと止まります。これが有名な「ゲネラル・パオゼ」（大休止）で、いよいよここから待ちに待った勇壮な行進曲が始まるのです。もし、ここで拍手をすると、この曲のもつ一番大事なメッセージに水をかけることになり、折角のメインディッシュが冷めたステーキのように味気ないものになってしまうことでしょう。

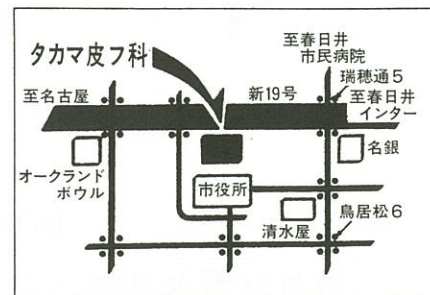
Q: 指揮者もさぞがっかりなさるでしょうね。

A: いえ、「この交響曲はアルコールを用意しなくてすむからいいね」と竹本先生はおっしゃいます。途中で拍手があると、次のコーダをアンコールだとみなさんが、思うからだそうです。冗談は別にして今日はCDの録音をするので、少々心配はしています。

タカマ皮フ科

春日井市 鳥居松 新19号沿

☎(0568) 84-3165



? 山本耳鼻咽喉科

医師 山本節子

春日井市高蔵寺町北3丁目5-10

☎ <0568> 51-7887

団員募集

- 本楽団は市民に開かれた交響楽団としてアマチュア・プロを問わず随時団員の募集をしております。
- 楽器をお持ちの方で活動に積極的に参加できる方をお待ちしています。
- 練習は原則として毎週1回日曜日の午後に中部大学女子短期大学（松本町1200）を主たる練習場として、行っています。（なお、平成6年10月からは、春日井青年の家（西尾町）も使用予定。）
- トレーナーによる分奏・合奏の指導等も定期的に行い、演奏会のみではなく普段の練習の充実による団員の音楽性の向上も図っています。

●募集楽器（H.6.6現在）

弦楽器（バイオリン科・ビオラ科・チェロ科・コントラバス科）

管楽器（オーボエ科・クラリネット科・ファゴット科・ホルン科）各若干名

打楽器 若干名

●平成6年度の主な事業

レコーディング（愛知芸術文化センター）4月24日

演奏旅行（武儀町）5月7日

定期演奏会 7月17日

'94春日井市民第九演奏会参加 12月11日

●申し込み方法

ハガキに①郵便番号②住所・電話番号③氏名④生年月日⑤性別⑥職業⑦演奏可能楽器⑧経験の程度を書いて事務局までお送りください。折り返し、オーディション等の日程をご連絡いたします。

●お問い合わせ

春日井市交響楽団事務局

〒487 春日井市松本町1200 中部大学内 (0568)51-1111

電気製品専門のオフプライスショップ……………

一流メーカー最新型人気商品1年365日

卸値で小売! お電話1本でお届けします。
価格は店頭かお電話で

※当店の商品価格には消費税3%は含まれておりません。別途消費税分をご負担いただきます。
お客様のご要望に応じて全メーカー全機種をマックス価格にてお届けします。
どこよりも安く売り消費者の役に立つこと、それが願い、マックス安売哲学です。

☎0568-82-0508 FAX0568-82-0506

愛知県春日井市瑞穂通り4-62

春日井市役所北

でんきの

マックス